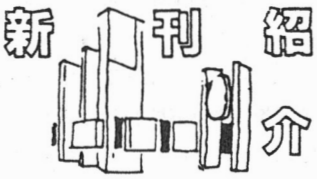
https://rodosoken.com/



宮下忠子編

『現状報告・路上に生きる命の群 ーホームレス問題の対策と提案ー』

本書は、国民１人ひとりに投げかけたボールである。苦悩、苦労、不安といった路上生活者１人ひとりが抱える真実を、本当のことを訴えかけているのである。これを受け止めて、今なすべきことは、なし得ることは何かを考え、〝命〟の重さを、「人間とは何か」ということを根本から問い直す書である。

「誰だって好きでホームレスをやっているのではない。野良犬生活でも生きていることは事実である。野良犬と言われようと、乞食と言われようと私は人間なのだ」と、路上生活者の手記によって第１章は始まる。生と死の狭間で生きている路上生活者の苦悶の声、彼らと直接的に関わっているボランティアの人々のやるせない思いが綴られている。世間で言われているような「惰民」、「自由人」とは全く言うことのできない悲惨な生活実態がそこにはある。ここまでリアルな生き様が語られるのは、長年路上生活者と関わってきた編著者宮下氏の絶え間ない活動の成果であろう。

第２章は、現場の最前線（大阪釜ヶ崎・横浜寿町・東京山谷の現場で活動している労働福祉センター職員、ケースワーカー、元医療相談員）からの報告である。個々の地域の現状から、全国的な統一施策の欠如、個別の解決方向を見ることができる。問題解決への取組みとして西成労働福祉センターの海老氏は、少ないながらもひとつひとつの対策が粘り強い運動によって実現してきたことを明らかにし、労働者の運動の高揚と、労働者と地域住民の共同とが必要であると訴えかけている。宮下氏は都内の主要な公園を巡回し、「今、路上生活者になっているあなたは何を訴えたいのか」と、直接、路上生活者の悩みを聞き、自筆で何が必要なのかを書いて訴えることを勧め、それを東京都に一緒に提出するという路上生活者自身の運動を強調している。形は違うものの、自らが運動に参加し、行政に訴えかけていくことが、問題解決の最良の糸口であることを示していよう。その背景には「路上生活者の死は社会構造的に作られた社会的な死」という意識があろう。

そして第３章において、「ホームレス問題連絡会議」など政策を検証しながら、国家政策の不備を鋭く批判し、問題解決のために失業対策を第一に掲げながら、各行政機関の歩み寄りによる総合的な救済支援が最も必要で有効であることを示している。そしてなによりも路上生活者の問題を人権問題として真摯に捉えていくことが、ひいては全国民の〝命〟を尊ぶ意識に連なっていくのである。

（随想舎・1999年８月刊・2500円）

（小澤薫・おざわ　かおる・中央大学大学院経済学研究科経済学専攻博士後期課程）

江口英一編著

『改訂新版　生活分析から福祉へ ー社会福祉の生活理論ー』

本書は、1987年に初版が発行され、その後10年余の間に９刷も重ねるという、いわばロングセラー書であった。今回の改訂版の発行は、単に用いられた数字が古くなったという理由だけでなく、より積極的な動機があったと思われる。バブル崩壊後、前面に出てきた市場原理主義とセットの「自己責任」原則に基づく社会保障・社会福祉の全面的後退がいっそう進み、勤労者の生活が直撃されていること、そうした政策を援護する「豊かな日本社会」「高齢者金持ち論」「貧困問題の解決は主要な課題でなくなった」などの根拠を示せない議論の横行に対し、科学的に反撃することの必要を感じていたからであろう。

最初に本書全体の分析視角として、生活分析をもとに福祉問題を考察する方向が示される。現代社会では生活の「社会化」が進展するが、そのことを通じて勤労者の生活の破壊と崩壊が広範囲に生み出される。その実態が３つの面から明らかにされる。つづく第２章では住宅、教育、医療などの生活の一般的条件について、第３章では公的年金、公的扶助、